

# 旧広島陸軍被服支廠の活用方法

## 赤レンガ造りの被爆建物との出会い

広島県原爆被害者団体協議会

佐久間 邦彦

# 自己紹介

## 被爆者として

- 生後9か月で爆心地から3 km己斐町で被爆
- 6人家族でしたが、祖母と姉二人は疎開中、父は観音町爆心地から4 kmで被爆
- 自宅で被爆したのは母と私、その後避難している時、黒い雨に遭遇
- 私は幼少の頃は病弱で小学4年、5年大病をし、学校を長期欠席した。

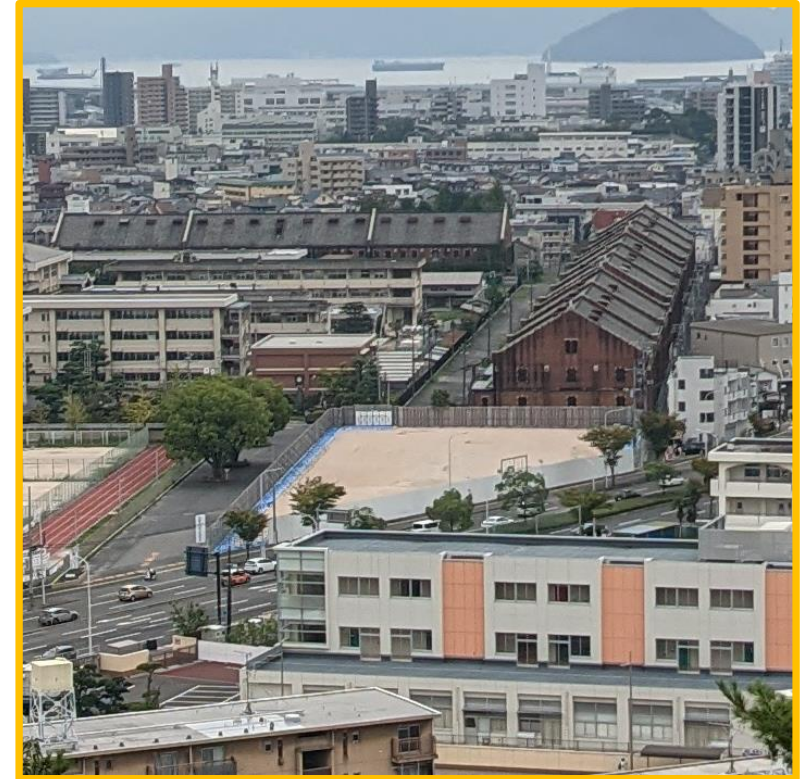
## 忘れられない赤レンガ造りの建物

- 私の記憶は6歳ごろから、自宅から10分位歩くと広い畑があった。
- 祖母が借りていた畑の傍に被爆した日本麻紡績給水塔があった。
- 自分が初めて触れた被爆建物で赤レンガ造りだった。
- 8歳頃千田町にある日赤病院（通院）この建物も赤レンガ造り
- 1970年頃から母が広大付属病院に入退院を繰り返していたが、この建物も赤レンガ造り。



# 被爆の後遺症かもしれない

- 幼少の頃から病弱で特に小学4年、5年生の時、大病し学校を長く休む。
  - 病気の原因はわからなかった。
  - 同時期に佐々木禎子さん12歳が急性白血病で亡くなったことラジオで聞いた。
  - 佐々木禎子さんが黒い雨に遭っていたこと後から知った。
- 
- 私が黒い雨に遭ったことを母から聞いたのは13歳ころ、それを裏付ける書類が2012年にみつかる。
  - それは1950年代、ABCCが被爆者を調査した調査票、それが見付き、それに記載されてあった。
  - その後数回、放影研を訪れた。
  - 帰りに陸軍墓地に立ち寄った。
  - ここから見えるあの建物なんだろうかと思った。



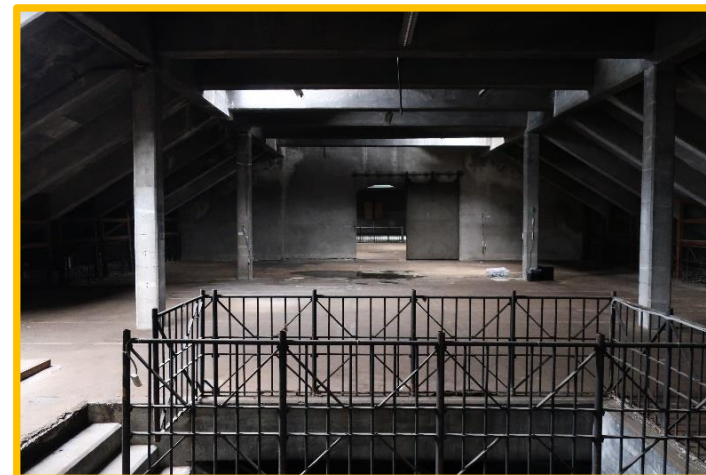


## 保存への思いと活用方法（アイデア）

- 現存する被爆建物として国内最大である旧広島陸軍被服支廠は1913年（T2）8月に竣工、今日までの歴史みると1945年（S20）までの軍都広島、侵略戦争への出撃基地、兵站基地としての32年間原爆投下時は被爆者の救護所、その後民間企業の倉庫や広大の学生寮と使われていたが、1995年頃から使われなくなった。
- この5月18日のマスコミによると「全4棟保存される見通し」と報道されている。
- 歴史を学ぶ場として保存し、後世に伝える方法として、次のような展示コーナーを設置が必要かと思う。
- ミニチュアで再現

# 1 軍都広島

広島は将兵・軍馬・武器弾薬・食料・衣服などを全国から調達・集結し戦地に配送し、回収するという兵站の役割を担わされていた。



# 2 被爆コーナー

避難所となった被服支廠での避難者の救援活動、そして全く不十分な救援活動の実態、人間としての死を迎えられなかった被爆者の実態を当時の記録資料、手記などを発掘、収集し、原爆のもたらした、あまりにも非人間的な姿をしっかりと追体験できるものにすることが求められている。

